

「森林は寺院と共に SVA の植林プロジェクトとカンボジア寺院の社会的役割」

岡本美哉

## 1. 本レポートの背景

筆者は2008年2月18日から3月14日までの1ヶ月間、SVA カンボジアの研修生としてカンボジアに滞在した。この研修に参加した動機は、筆者は国際開発研究科に属しているものの日本国内の事象について研究をおこなったため、修了前に開発の現場を自分の目で見て、NGO の活動を経験することによって国際協力の活動についてより多角的に理解したいと感じていたからである。カンボジアを選んだのは、ひとつには、以前訪問したことがあり、また、知人がカンボジアで支援活動に携わっていることからカンボジアに親近感を抱いていたためであり、また、SVA カンボジアによる文化支援活動が、筆者の興味を惹く内容であったからである。

SVA カンボジアの文化支援活動の、どのような点が筆者の興味を刺激したのか。この点は、つまりは今回の研修の目的であり、また、インターンの活動を通じて何を知らうとしたのかという、いわゆるリサーチ・クエスチョンでもある。

筆者が SVA カンボジアの文化支援活動を知ったのは、SVA のホームページを通じてである。SVA のホームページでは、寺院を中心とした植林活動が行われていること、僧侶を対象としたセミナーが開催されていること、「伝統と文化」に関するセミナーが開催されていることが紹介されていた。このなかで筆者は特に寺院を中心とした植林事業に関心を持ち、寺院と植林の関連性はなにか、さらに、同じ事業の中の「伝統と文化」ともなにか関連性があるのだろうか、これらが今回のリサーチ・クエスチョンとなった。

筆者は寺院と自然保護活動の関係について、より詳しく知りたいと考えた。筆者にとって仏教と森の関係は大変興味深いものである。筆者は、もう一昔前になるが林業ボランティアに参加していたことがあり、林業を森づくりとすると、そのひとつおりの作業をかじったことがある。また、西国三十三箇所観音霊場めぐりや山登りのなかで山中の寺院や修験道の場に行くうちに、日本では近代化の過程で、明治初期の廃仏毀釈という仏教の否定や修験道の禁止と国家神道の興隆、さらに第二次大戦後の神道の否定という経験から、宗教的なことと社会が分離してしまい、森との関係についても自然の中で修行するといったようなことの意味を見失ってしまったのではないかと考えた。日本と比較して研究をできるほど日本のことも十分に知識があるわけではないが、日本のことも念頭におきつつ、カンボジアの宗教と文化の関連性を研修を通じて学ぶことが、研修の目的となった。

本レポートでは SVA カンボジア研修で筆者が学んだことをもとに、SVA の活動やその背景について記したい。

## 2. SVA 文化支援事業の沿革

植林プロジェクトは SVA カンボジアの文化支援活動の一環として実施されている。SVA カンボジア文化事業課が担当である。SVA カンボジアが植林プロジェクトを開始したのは 2006 年のことであり、比較的新しい事業といえるが、文化支援活動自体は、1992 年の SVA カンボジア事務所開設以前から始められており、SVA カンボジアの他の支援事業と較べても古いものである。

カンボジアでは長い内戦やポル・ポト時代の虐殺や破壊によって、多くの寺院、経文や文化財、そして僧侶も失われた。そのため、カンボジア(あるいはクメール)の精神文化や伝統的社会の基盤となっている仏教関連への支援が必要ということから、文化支援事業が行われている。

【活動の歴史】 (SVA カンボジア発行リーフレットより抜粋)

1982 年	第 1 回カンボジア語大辞典復刻、配布
1990 年	第 2 回カンボジア語大辞典復刻、配布
1992 年	カンボジア語図書復刻などの文化支援事業開始
1995 年	パーリ語・クメール語トリピタカ(南伝大蔵経)の復刻、全国規模での配布
1995-98 年	仏教研究所(プノンペン)の建設協力
1997 年	全国規模の研修会開催を開始
1997-2000 年	仏教学校 2 校(コンボンチャム州、プレイヴェン州)とコミュニティ図書館(シアヌークビル、カンダール州)
1997-2005 年	プレ・シアヌーク・ラジャ仏教大学(プノンペン)へ家具寄贈
1999-2001 年	楽器寄贈、子供たちや寺院対象の研修会の開催(カンダール、シアヌークビル)
2004 年	地方寺院に関する調査の開始
2006 年	植林活動の開始

## 3. 植林プロジェクトの概況

SVA カンボジアの植林プロジェクトでは、スパイリエン州とコンポントム州の 2 つのモデル事業が実施されている。

### (1) スパイリエン州における活動

SVA カンボジアはスパイリエン州(Svay Rieng: プノンペンより国道 1 号線を南東へ車で約 3 時間で州都スパイリエンに着く。州の東及び南はベトナムと接している。)のスパイチュラム郡(Svay Chrum)で植林モデル事業を実施している。以下は、SVA カンボジア事務所『2006 年年次報告書』をもとにした活動内容の概要である。

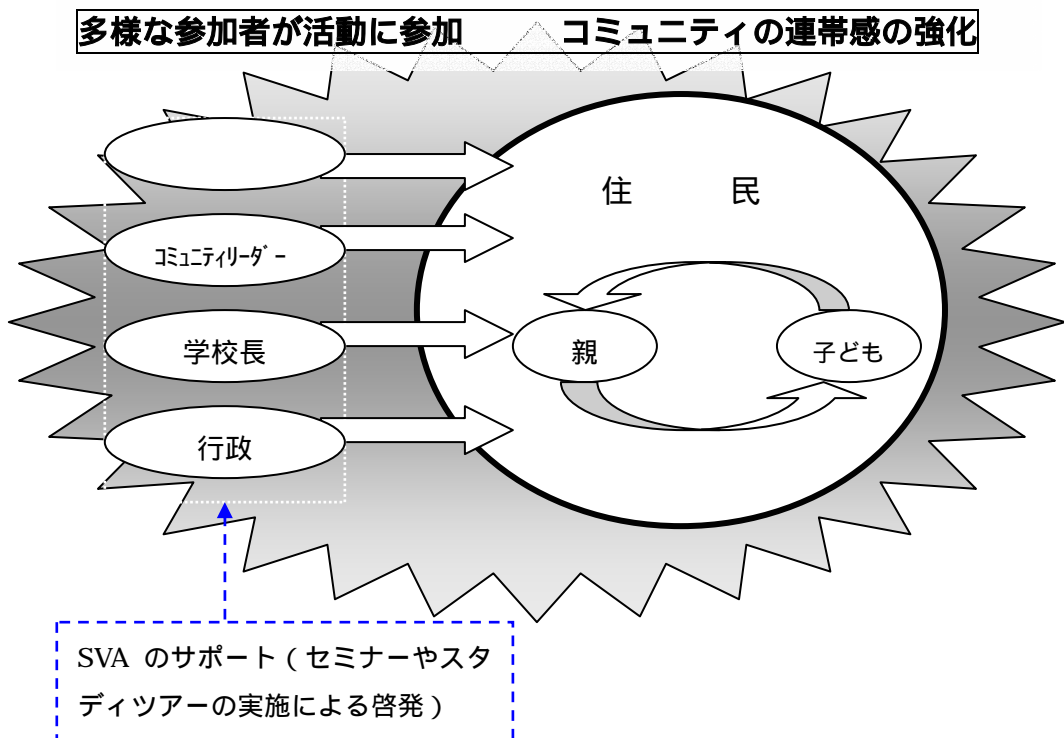
- ・ 開始時期：2006 年
- ・ 場所：Angkor Sar Temple (Svay Rieng 州、Svay Chrum 郡)
- ・ 樹木育成場所の面積：6 メートル × 12 メートル

- ・ 苗木の量：15,000 本
- ・ 植林した苗木：3,000 本
- ・ 植林参加者：僧侶、住民など
- ・ 水利施設：同寺院内の既存の浅い池を 1,500 立方メートル掘削。
- ・ 植林場所：郡内の灌漑用水路沿い

このように、この活動は寺院の僧侶だけでなく、住民なども一緒になって取り組まれている。この点が、これまでの SVA カンボジアの文化事業が寺院・僧侶への直接的な支援であった点と大きく異なる点である。

筆者は研修中に、主に SVA 担当者ピチェット氏に SVA 植林プロジェクトに関しインタビューを行ったところ、植林活動について以下のような情報を得た。

SVA が植林プロジェクトで特にターゲットとするのは、僧侶、コミュニティリーダー、学校長、行政（植林事業に関係しているのは、宗教局、教育局、文化局の各行政機関である。）である。これは、僧侶は人々から信頼されており、人々に対して教える（この場合は特に精神面、心の教育を意味する。）ことができるということであり、コミュニティリーダーは住民一般に対して、学校長は親を通じて子どもに、あるいは子どもを通じて親に対して、コミュニケーションすることができるという考えに基づいている。このように、多様な参加者を活動に巻き込むことについて、その狙いはコミュニティの連帯感 (solidarity) を強化することである。下図はこの考え方を図で示したものである。



SVA がスパイリエンを活動場所に選んだ理由は、スパイリエンは最も森林破壊の進んだ州のひとつだからである。ピチェット氏によると、内戦前は 70%であった森林率が 20%に減少したという。森林は、内戦中には森林は敵が隠れる場所となるので伐採されてしまったり、戦争が終了した後の混乱期にも不法に伐採され輸出されたという。森林の樹木をコミュニティが自分達で使う分には森林破壊につながらないが、大規模な伐採が森林破壊の元凶となったと考えられており、森がなくなったことで、雨季には水が溢れ、乾季には水不足になる状態となったという。森林の持続可能な利用がなされなくなり、森林の保水機能が失われ、人間の生活にも影響を及ぼすようになった状態である。

植林プロジェクトの目的について、SVA イートン氏もピチェット氏も繰り返し筆者に説明したのは、SVA カンボジアの活動は、スパイリエンの森林回復の意味もあるが、なによりも人々に自然を大切にする「心を養うこと」に重点が置かれていることである。森林減少は内戦後の不法伐採・輸出によるものだけでなく、森林の大切さを理解していない人々が土地や水田を売却することで現在も減少が続いているという。人々が、樹木から受ける恩恵(建材・きのこなどの食物・薬等の供給や保水機能等)を、仏教の教えとともに理解し実践すること、これが SVA 植林活動の目標である。ここでの仏教の教えとは、釈迦(ブッダ)が森林の中で悟りを開くことができたことに由来し、自然との共生はブッダの教え(つまり仏教)の実践であるとされる。(カンボジア含む小乗仏教は特にブッダの教えを重視するものである。)自然との共生、自然の持続可能な利用は宗教的实践(ブッダの教えの実践)と同義であり、このことを人々に教えることができるのは、ブッダの教えを教えることができる僧侶たちであり、寺院がその機能を担う場所である、という考えで活動が行われている。

こうした宗教的实践と森林との関係は昔からのものであり、伝統的に寺院が森林保全の役割を果たしていたという。筆者にとってとても印象的であったのだが、カンボジアでは森林があるとそこに寺院があることがわかるという話である。日本の鎮守の森や、寺院も山中や樹木のある中にあるのと同じようなものかもしれない。(ちなみに筆者が国道 6 号線を 3 時間ほど走る車中から目視で確認したところ、6 つ程度の森と寺院が確認できた。そのとき同行していた SVA スタッフ(図書館事業スタッフ)に、森林があれば寺院があるとわかるのは本当かと尋ねると、わかるという返答であった。ただしプノンペンの寺院は都会にあるゆえ森林の中にはない。)

以上のことから、この活動は自然保護活動の側面を持ちながらも、宗教的实践を通じてコミュニティの結束を高めること、人々の精神面、道徳面の教育・啓発を行うこと、また、寺院が森林保全に対して果たしていた伝統的役割を再確認・強化することに重点が置かれているところが特徴的である。



スパリエンの育苗場所 (SVA 提供)



苗の世話をする生徒や住民達 (SVA 提供)



水遣りや植え替えをする僧侶達 (SVA 提供)



植樹作業の様子 (SVA 提供)



植樹場所に育った木 (SVA 提供)

## (2)コンポントム州における活動

コンポントム州(Kompong Thom: プノンペンより国道6号線を北へ車で約3時間で州都コンポントムに着く。)では、同州内のサンボー・プレイ・クック歴史(宗教)遺跡地区(Sambo Prey Kuk)におけるコミュニティ・デベロプメント プロジェクトの一環として SVA の植林活動が実施されている。

「サンボー・プレイ・クック コミュニティ・デベロプメント プロジェクト」は、この地区の住民の自治、観光を主とした住民自身による発展をサポートしようというものである<sup>1</sup>。SVA の植林事業は、このプロジェクトの一翼を担うものであり、基本的な考え方は上述のスバイリエンのプロジェクト同様、コミュニティの連帯感の強化を狙い、コミュニティリーダーや行政関係者に対する働きかけを行っている。

筆者はコンポントム州における事業を視察するスタディ・ツアーに同行する機会を得た。スタディ・ツアーの詳細は次項で記すので、コンポントム州における活動の詳細等は次項にゆずりたい。

## (3)スタディ・ツアーの実施

2008年2月25日～29日、SVA カンボジア文化事業課は植林プロジェクトを実施しているスバイリエンとコンポントムの両地区の高僧とコミュニティメンバーを対象に、エクステンジ・スタディ・ツアーを実施した。両地区からの参加者がそれぞれの植林活動を紹介し意見交換しあうものである。スタディ・ツアーの概要は以下のとおりであった。

### 【スタディ・ツアー概要】

・ 目的:

高僧とコミュニティに対して、コミュニティの自然と文化伝統遺産に関する意識を喚起する。

コンポントム、スバイリエン、タケオの各寺院の経験を持ち寄る。

クメールの古代建築美術と希少樹種の保全について、コンポントム及びタケオ州の歴史的地区から学ぶ。

・ 参加(予定<sup>2</sup>)者: 14名(スバイリエン10名、コンポントム4名)

・ 行程:

日にち	時間	主な活動	場所
2月25日(月)	午前	- 移動	スバイリエン
	午後	- 植樹場所(Wat Krol Kor 寺院)と育苗場所(Angkor Sar)訪問	
26日(火)	終日	- 森林(Santi Sena)訪問 - 総括	スバイリエン

<sup>1</sup> “Sambo Prei Kuk Conservation & Development Community”リーフレットより。同リーフレットによると、ドイツ GTZ の支援があるもよう。

<sup>2</sup> 実際の参加者数を筆者は把握していない。

27日(水)	午前	- 移動、Wat Phnom Tamao 寺院(タケオ州)訪問、 森林と野生動物の自然保護区域の訪問 - 移動 - 総括	タケオ  コンポントム
28日(木)	終日	- サンボー・プレイ・クックの育苗場所・植樹場所 の訪問、古代寺院訪問 - 総括	コンポントム
29日(金)	午前	- 移動、解散	

### サンボー・プレイ・クック コミュニティ・デベロプメントの概況

ここでは、筆者の参加した2月28日のサンボー・プレイ・クックにおけるスタディツアーについてその様子を紹介したい。まず、サンボー・プレイ・クックの概況であるが、ここは6～7世紀(日本でいえば飛鳥時代)のプレ・アンコール時代(カンボジア史の時代区分ではこのように「アンコール前」と表現する。)のイナサプーラ(Inasapura)という都だった地区で、古代ヒンズー寺院遺跡郡が残る遺跡地区である<sup>3</sup>。この地区には7つのコミュニティ(村)があり、およそ600人の村人がいる。内戦で疲弊した村の復興や貧困削減を解決するために、コミュニティ・デベロプメントの組織が立ち上がった。この地区は内戦で遺跡の破壊もあり、木も切られてしまい、まずコミュニティを成立させるところから始めなければならなかったという。クメール・ルージュもいて、盗掘も行われたため、放っておけば廃れていくだけという状態であった。そこで遺跡や自然を守るためにはコミュニティが必要であるとして、保全活動を行っている。今では木を切ることや盗掘は規制されている。しかし、近年土地価格が上がっており、木を切って土地を売る人も出てきてしまっているという。

コミュニティ活動には、住民だけでなく、警察官や兵士も活動に参加している。コミュニティリーダーの年齢が上がってきており、若い人を養成しなければならない状況である。コミュニティでは30人の観光ガイドを養成中で、コミュニティの中から若者を選んでガイドの養成を行っている。筆者はガイドになるために勉強中の20歳の女性と英語で話をしたが、彼女は英語を勉強中で、勉強方法はラジオを聞きながら勉強しており、学校に行くにはお金が必要で、もっと英語を勉強するためにガイドとしてその費用を稼ぎたいと考えている。(彼女の英語はまだまだ片言であった。)彼女によると、この地区に観光に来るのは、フランスが一番多く、次にアメリカ、他の欧米諸国、タイ、中国、日本の観光客だという。筆者のコンポントム滞在中には欧米人らしい観光客(貸しきりバスの団体客や個人客)を見かけた。

SVA イートン氏とピジェット氏によると、これら自然や遺跡の保全活動は、コミュニティにとっても「文化的アイデンティティ」の確認になるという。上記のようにこの地区はプレ・アンコール時代のヒンズー寺院の遺跡群であるが、コミュニティの人自身も正確な歴史を知らず、親から口承されているだけであり、アンコールや他の寺院との区別を知らないのである。従って、コミュニティ活動への参

<sup>3</sup> 2003年より早稲田大学による「サンボー・プレイ・クック遺跡群保存事業」が実施されている。( <http://www.hist.arch.waseda.ac.jp/SPK/web-content/top.html> )

加は、歴史への理解や親しみを通じて、自分の属する集団がもつ文化や歴史を知ることができ、それが集団への帰属感や自身のアイデンティティ形成に寄与する、と考えられているのである。また、コミュニティにとっては、カンボジアの中でも最も古い遺跡(群)のひとつを自分達で守っていることで誇りを持つこともできるという。

筆者がツアー中に、イートン氏の助けを借りて、スバイリエンからの参加者5名(全員僧侶ではなく、学校長やコミュニティリーダー達)に尋ねたところ、サンボー・プレイ・クックを今回のスタディ・ツアーで初めて訪問した人は5人中5人であった。さらに、アンコールワットに行ったことがある人は5人中2人であった。イートン氏の補足によると、学校の先生や学校長であれば歴史を知っているがこの遺跡のことも知っているが、そうでなければ遺跡のことも知らない人も多いという。またアンコールワットでも行ったことがないのは、地理的な遠さが理由なのではなく、財政的問題であり、特に僧侶に話を限れば、僧侶は寺院に泊まることのできるの主に移動費が問題となるという。アンコールワットは世界遺産に登録され外国からの観光客が今では気軽に訪れることができるようになっているが、住民にとって実際はまだ遠い存在であることは、ガイドブックなどに記載されているようなカンボジア(クメール)の象徴としてのアンコールワットイメージとの距離を感じさせた。

コンポントムにおける SVA カンボジアの植林活動は、上述のようなコミュニティ活動の一環として行われており、SVA もコミュニティの活動をサポートするというスタンスをとっている。そのため、寺院や僧侶の指導的役割に期待する面はやや薄れている印象を受けた。

### SVA スタディ・ツアーの様子と SVA の活動

サンボー・プレイ・クックでのスタディ・ツアーの内容は、植林場所の視察、遺跡(Prasat Sambor)視察、SVA 植林事業現場視察、遺跡保存活動視察、昼食、遺跡(Prasat Tao と Prasat Yeai Poeum)視察、意見交換会(総括)であった。ツアー中には SVA イートン氏が講師を務め、また、サンボー・プレイ・クック コミュニティ・デベロプメントのメンバーが同行し、遺跡の説明やコミュニティ・デベロプメントの活動について適宜説明を行っていた。

以下、写真にもとづきながらスタディ・ツアーの様子(時系列に並べている)と SVA の活動を紹介したい。



遺跡群への入口の道路。道路の両脇に植えられているのはカンボジアサクラの若木で、大きくなれば花が咲き、来訪者を出迎える雰囲気をつくるのが狙いという。若木は枝の柵で囲われている。若木の世話(主に水遣り)はコミュニティの住民達によって行われている。



植えられた苗木。枝の柵で囲われている。入口の道路はこのように森へ繋がっている。樹木は今なお農村では薬品として重要であり、その他にも建材などの板やきのご類の供給、また森林の保水機能や浄化機能は水の供給にも重要であることが説明された。



Prasat Sambor 遺跡の、樹木に覆われた寺院遺跡。古代ヒンズー寺院で、根のすきまから遺跡の中を覗くことができる。中にあるサンスクリット語が書かれた碑の解説をイートン氏が行っていた。

この遺跡の中には石(あるいはレンガか。)で造られたリングの建造物があり、遺跡の外部につながっている構造になっている。イートン氏によると、このリングの建造物はヒンズーの神であるシヴァ神とその妻が一体となったものであり、プラスとマイナスという世界の象徴である。この建造物に水をながすと、水は外部に通じる水路を通じて外に流れ出る。流れ出た水は聖なる水となり、結婚式など様々な祝福に使われたという。なお、カンボジアにはヒンズー教ののちに仏教が入ってきており、このヒンズー寺院遺跡は仏教以前の時代のものである。



これも Prasat Sambor 遺跡の、古代ヒンズー寺院遺跡。上掲の寺院

も、木の根に覆われているのはこのような建築物である。

イートン氏が筆者に説明してくれたところによると、カンボジアには大きく3つ、アニミズム(木や石への信仰、祖霊信仰)、ヒンズー教、仏教という宗教があり(実際にはイスラム教徒や少数民族などもある。)、ヒンズー教はインドからもたらされ王が採用しカンボジアの宗教となり、仏教は後にカンボジアに入ってきた。仏教は、ヒンズー教との間に融和を図りつつも、一方で互いに寺院を破壊しあうなどの摩擦もあったが、後に王が採用してカンボジアの宗教となった。(これが13世紀頃であり、有名なアンコール・トムを建造したジャヤバルマン7世の時代である。)仏教寺院の建築・装飾様式の中にもヒンズーの影響は見られ、またお経の中には仏教とされているものでも実はヒンズーのものであることもあるが、僧侶ですらこのようなことを知らない場合があるという。

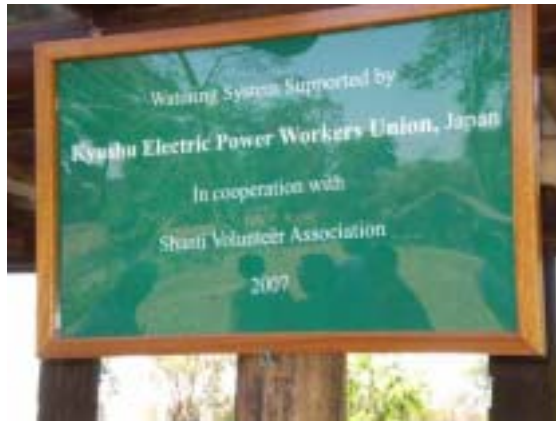
このような宗教の状態は、日本でもアニミズム・祖霊信仰と神道の融合、神道と仏教の神仏習合など様々に交錯している状況を思い浮かべると理解しやすいと筆者には思われた。



SVA のプロジェクトの育苗の場所。遺跡群の中の広場にある。これらの苗はブノンペンで購入されたものである。苗の世話もコミュニティの人々が行っている。SVA ビレット氏による説明では、このプロジェクトはコミュニティの住民のためのもので、活動の主体は住民であり、住民自身により実施されている。



育苗場所で説明するコミュニティ・デベロプメントのメンバー。コミュニティ・デベロプメントのメンバーは揃いのポロシャツを着用していた。



SVA による水利施設。上掲の育苗場所の隣にある。九州電力労働組合の支援による。SVA がコミュニティ・デベロプメントに協力しているのは、上掲の育苗施設と、この水利施設である。



樹木は伝統的な薬品を提供するものでもある。これは遺跡群の森の地面に落ちていた実である。写真左に写っているのは手袋をしている筆者の親指である

が、この親指の先ほどの大きさの実は、漢方薬のもとになるもので、集めて中国人ドクターに売るのである。中国へ輸出され、高い漢方薬になるという。このような漢方のもとになる実のなかには、少量であればマラリアの薬となるが、多量に摂取すると死に至るものもあるという。

なお、こうした樹木の解説もイートン氏が行っており、カンボジア随一の知識人である氏の見識の高さにはただただ感服した。



Prasat Tao 遺跡。イートン氏が建造物の時代的特徴等を解説し、参加者達は自然とともに遺跡やカンボジア宗教史についても学んでいた。

すべての遺跡の視察が終わった後、僧侶達を中心に参加者全員でお経をあげた。筆者には内容はわからなかったが寺院遺跡に立ち入り、見学させてもらったことへの感謝を述べているように思われた。印象的だったのは参加者全員が唱和していたことである。筆者は当然ながら隣で手を合わせることはできなかったが、僧侶以外の人々も唱和できるということは、お経を読むことはカンボジアでは今なお一種の教養であるのかなというようなことを考えていた。



余談になるが、遺跡へ続く道路は決してよい状態ではない。この日は道路の穴の補修のためトラックが土を落としており、筆者たちの車は運悪くそのトラックの後についたため、ピチェット氏が鋤で土をならし、我々も車から降りて石を除けた。こうしないと車が通れないのである。赤土を固めただけの道路は穴がおおく、また、雨季になれば土が流出することが容易に想像ができる状態であった。単純にアスファルトで舗装すれば問題が解決するというわけでもないようである。カンボジアではこ

のような道路コンディションは決して一部の悪路だけなのではなく、一部の大都市間をつなぐ国道を除きむしろ普通といえよう。

#### 4. SVA 植林プロジェクトの背景

##### (1) 文化支援事業と植林プロジェクトの関係

植林活動プロジェクトはじめ、SVA カンボジアの文化支援活動の背景や特徴を理解しようとする、カンボジアの歴史と SVA カンボジアの文化支援事業の歴史をおおまかにでも知っている必要がある。なぜなら、文化支援活動はクメールの文化・社会の復興を目的としているからで、ここでいう「復興」とは、単に伝統文化の踏襲を現代で行う試みではなく、内戦と国内情勢の混乱で荒廃した社会を自分達の手で取り戻すということを意味しているからである。

SVA カンボジアの文化事業課では 10 年以上前から全国規模でセミナーを開催している。セミナーは僧侶や寺院関係者を対象としたもので、セミナーではブッダが森の中で悟りを開いたことになんで寺院と森には深い関係があることから、自然との共生はブッダの教えの実践であり、伝統的に寺院が自然保護活動を行ってきたことを伝えている。セミナーを通じて、仏教関係者に自然保護の意義の理解と意識の高揚、そして自然保護への行動を喚起することが目的である。このようなセミナーを実施するのは、ポル・ポト時代に多くの僧侶が失われたために、自然との共生と宗教的実践の関連(つまり、ブッダの教えの実践として伝統的に寺院が自然保護活動を担ってきたこと)について知らない僧侶も多いので、仏教関係者に対する教育が必要との事情が背景にある。

このようなセミナーを通じて、SVA が 2006 年に植林プロジェクトを開始するより以前から、寺院や僧侶による自然保護への支援や啓発活動はすでに実施されていたのであり、植林プロジェクトはその延長線上に位置づけられる。

##### (2) 植林プロジェクト開始の背景

では、なぜ SVA は最近になって(正確には 2006 年から)、植林プロジェクトという自然保護活動・植林活動支援に焦点をあわせたプロジェクトを開始したのか。この点について、SVA イートン氏やピチュット氏への聞き取りの中から、以下の事由がわかった。

ひとつは、これまで述べたような僧侶や寺院を対象としてすで実践されてきた活動をサポートし、強化することである。寺院が伝統的に自然保護活動を行っていたのを具体的に実行してみることである。二つ目は、大規模に植林プロジェクトを展開するためである。ここでいう大規模とは、単に植林の本数が多いとか面積が広いとかいうことではなく、寺院や僧侶を対象とするだけなのではなく、コミュニティ全体や行政も巻き込むという意味である。つまり、仏教関係者という「点」に焦点を絞った活動ではなく、コミュニティという「面」への展開を図るためといえよう。三つ目に、木を植えて育成することで、プロジェクトの成果が目に見えることを狙うためである。これまでの仏教関係者へのセミナー等は、心・精神を養うものであり、成果が目に見えるというのは困難であるのに対し、植林プロジェクトは木の成長という目に見える成果物が得られる。ピチュット氏によると、他の SVA カンボジアの事業は、例えば学校を何校建設した、図書館員を何人養成した、といった成果が示せるが、

文化支援事業はそのような事業ではなく、心の養成であるから目に見えないのであるが、それ故ドナーへのアピールが難しい、と説明していた。目に見える成果物は、プロジェクトの関係者にとっても満足度やインセンティブという点で重要であるが、SVA カンボジアにとっても、ドナーを得るという観点で、視角や数字で活動を示すことができることは大変重要なのである。

これらの理由は、プロジェクトとしての効果や成果がより具体的に、かつ対象を広げた充実したものであるようにという観点からのものであり、植林プロジェクトが SVA の文化支援事業の展開を意図したものであることがわかる。

このように植林プロジェクトの背景には、内戦やポル・ポト時代からの復興という側面と、SVA の文化支援事業の展開という側面がある。

## 5. SVA 植林プロジェクトの特徴

ここでは、SVA の植林プロジェクトについて、国際協力活動という観点から、その特徴をあげてみたい。なお、ここでいう国際協力活動というのは、国際的な、つまりある国に基盤を有しながら別の国で協力活動を行っている NGO の活動という意味であり、植林プロジェクトに関しては、日本の SVA という NGO がカンボジアで行うプロジェクトである。

### SVA のカンボジア仏教支援の歴史と唯一性

上述のように、カンボジア仏教に対する SVA の支援活動の歴史は、1982 年にまで遡り、国際 NGO のカンボジア支援活動としては古くからの活動といえる。

さらに、他の国際 NGO では、このような仏教支援活動を基とした植林支援活動を行っている NGO は存在しない。SVA イートン氏の説明によると、そもそもカンボジアにおいて仏教支援活動を行っている NGO は現在 SVA のほかにはないのである。SVA はカンボジアにおいて仏教支援活動を行う唯一の国際団体であるという点が特徴的である。

### カンボジア仏教関係者との信頼関係

上記のように、SVA はカンボジアの仏教支援について歴史があり、またその支援も全国的なものである。そのためカンボジア仏教界と SVA には十分な信頼関係があると思われる。

さらに、SVA の仏教関係者との信頼関係は、単に歴史や規模に基づくものだけではない。

カンボジアでは僧侶の使用する言葉は一般のクメール語とは異なる。仏教用語としてパーリ語が用いられることがあるのはもちろんであるが、同じクメール語でも僧侶が使用する言葉は異なるという。(筆者が聞いたのは「食べる」という言葉であったと思う。)従って、この活動を一般に伝えていくためには二段階の作業が必要であって、まず、僧侶の言葉を理解でき、さらにそれを英語で表現することが必要となり、さらに日本で伝えるために英語を日本語で表現する必要がある。このプロセスは決して簡単なことではなく、非常に特殊な作業となることは想像に難くない。というのも、この作業は単に翻訳として言葉を言葉に置き換えるのみならず、仏教のことを理解したうえで別の言葉で表現しなくてはならないからである。

SVA では、現在、副事務所長のイートン氏と 1 名のスタッフ(ピチェット氏)が文化セクションを担っているが、スタッフにはこのように仏教に対する深い理解が求められる。そのため、少数精鋭で活動を担っているのが現状であるが、こうしてスタッフを厳選することにより、カンボジアの仏教関係者との間で信頼関係を構築・維持することが可能となっていると思われる。

#### ドナーの特徴

SVA カンボジアの文化支援活動に対する日本側のドナーは、ごく限られた団体であった。仏教支援については、日本の仏教団体である立正佼成会が主たる支援者である。このように支援者が限られていたことは、上述のように仏教支援活動に際して仏教への深い理解が必要とされることと一致すると考えられる。

SVA カンボジアでは、文化支援事業に対して新たな支援者を模索中である。上述したサンボー・プレイ・クックのスタディ・ツアーでも述べたとおり、植林の水供給設備を九州電力労働組合が寄贈している。このような仏教関係者以外のドナーの支援を得ることは、SVA カンボジアの文化事業にとっては比較的新しい試みといえる。この場合、仏教関係者以外の支援者に対して、どのように文化支援事業を理解してもらうかが課題となる。この点について、SVA スタッフのピチェット氏は、ドナーにはまず説明し、実際に見てもらうことが重要であると述べており、実際に見ることでドナーには一定の理解をすることが期待されている。一方で、氏は、ドナーがプロジェクトの哲学(つまり、カンボジア仏教の考え方)まで全て理解することは難しいことは、SVA 側も理解していると述べていた。

日本のドナーを想定した場合、仏教関係者も多数いると思われるが、この植林プロジェクトに関しては、自然保護活動や、環境問題としての持続可能性に関心を抱く層も支援者になる可能性がある。この点について、ピチェット氏によると、さらに大きなプロジェクトを実施する(例えば、現在のスバイリエン州のモデルプロジェクトを全国的に展開する)ためには、実際問題としてもっとドナーは必要であり、SVA としては、本事業に共感し、実際のプロジェクトの現場を見て理解してもらうことができれば、仏教関係者にとどまらずより幅広いドナーを受け入れる意向であるということであった。

## 6. SVA 植林プロジェクトの課題

これまでみてきたように、SVA の植林プロジェクトは、自然環境保全、カンボジアの伝統的文化・社会の復興、そしてコミュニティ強化を同時に兼ね備えたプロジェクトであるといえ、プロジェクトの効果への期待は大きい。

しかし、いくつか課題もあるようなので、ここでは植林プロジェクトの課題について考えてみたい。

#### 宗教的プロジェクトとドナーの関係

まず、植林プロジェクトは、これまで述べたように宗教的实践としての自然保護の考え方に基づき、寺院が中心となって行われているものである。そのため、このような文化的・宗教的な側面を理解しないとプロジェクト自体を理解できないことになってしまう。

プロジェクトが国際NGOの国際協力活動として行われている以上、プロジェクトに対してはドナーが必要である。植林プロジェクトの場合、ドナーは日本側ということになり、その賛同を得るためには、プロジェクトに対する一定の理解と共感を得る必要がある。

上述のように SVA カンボジアの仏教支援活動は長く日本の仏教団体からの支援を受けてきた。植林プロジェクトは既に述べたように、SVA 文化支援事業の展開であり、自然・環境という観点からも新たな支援を得られる可能性がある。その際に、どこまで宗教的・文化的側面に対する理解をドナーに求めるか、という点が支援を得るにあたっての課題となるだろう。上述のように自然・環境という観点からは幅広い支持を得られる可能性があるため、その調和が課題となると思われる。

#### 技術的課題

次に、植林プロジェクトのプロセス、つまり、苗を調達し、育成し、植え替え、若木を育成し、植樹し、育てていくという間に、うまく育たないなどの技術的な問題があることである。例えば、雨季の雨で苗や若木が土壌ごと流されてしまったり、若木が牛に食べられてしまったりするのである。この植林プロジェクトには技術的な専門家は関与していない様子であった。植林プロジェクトは2006年開始であり、まだ試行錯誤の段階であるともいえるが、苗の育成や植樹後の定着率をあげるといった課題はこれからも対策が必要となるだろう。

#### 寺院の社会的役割と都市化・現代化

そのほかに、寺院や宗教の社会的な役割が、都市化や現代化の進むカンボジアでどのように変化していくか、という点がある。植林プロジェクトは寺院を中心とした伝統的コミュニティ構造に基づき実施されているが、伝統的コミュニティの変容によっては、寺院の社会的役割が低下するとか機能を失うことも考えられる。カンボジアの社会の中で寺院がコミュニティの中心的機能を担っているかどうかは筆者の1ヶ月の滞在ではわからなかったが、特にプノンペンで都市化が進み地方から人口が流入している状況を見ると、人の移動に伴いコミュニティ自体が変容しているのではないかと想像された。SVAの若いスタッフもお寺にはそれほど行かないと話していた。なお、現在カンボジアでは開発を見越した土地売買が盛んであるが、SVA ピチェット氏によると寺院の土地の売買は規制されているということであり、寺院が簡単になくなってしまおうということにはならないようであった。

### 7. まとめ カンボジアにおける寺院の社会的役割について

これまで明らかになったことをまとめると、SVA 植林プロジェクトは、自然との共生は仏教においては宗教的实践であり、それゆえ伝統的に寺院が森林を守ってきたという考えに基づいており、寺院以外の学校や行政等の関係機関と共に、コミュニティの自然環境をコミュニティの住民自身により保全しようとする活動である。

ここで、寺院の社会的役割について考えてみると、植林プロジェクトでは一般の自然保護活動とは異なり、宗教的实践を通じてコミュニティの結束を高め、人々の精神面、道徳面の教育・啓発を行うことに重点が置かれている。イートン氏によると、フランス植民により近代的学校制度が導入さ

れる前は、カンボジアでは寺院が教育機関として機能していた。この教育機関機能が、現代では人々の精神面に対する啓発機能として期待されているといえる。また、寺院と森林の関係性という面から考えてみると、寺院は宗教的实践として自然環境保全を実行することが求められており、自然環境保護活動も、寺院の社会的役割として期待されていることといえる。また、これら寺院の社会的役割は伝統的なものと考えられており、寺院がこうした社会的機能を果たすことは、内戦やポル・ポト時代に失われたカンボジアの文化や社会の復興という意味を有するのである。

SVA の植林プロジェクトにおける寺院の社会的役割について整理すると、寺院と森林は宗教的实践で結ばれ、寺院とコミュニティは教育機能で結ばれており、それぞれの関係は伝統的なカンボジア(あるいはクメール)の文化・社会であると考えられている。従って、ここでの寺院の社会的役割とは、寺院と森林(自然環境保護)、寺院と伝統文化、寺院とコミュニティというそれぞれの関係性のうえに成り立っているものである。

SVAの植林プロジェクトは、こうした寺院の社会的役割に期待し、またその役割を(再)確認し、あるいは強化するための活動といえよう。

## 8. 最後に・・・

筆者の1ヶ月の滞在で感じたことであるが、カンボジア社会はこれから急激な経済発展や都市化に直面することになり、寺院の社会的な役割も含めて、伝統的なコミュニティのあり方や自然環境も変化していくのではないかと思う。その際に重要なのは、いかに持続可能な社会を自分達でつくっていくかという観点であろうと筆者は考える。このプロジェクトについても、伝統・文化や自然、コミュニティの調和を目指すには持続可能性という観点が必要であり、さらに、国際的な協力関係に依拠しつつプロジェクトを継続するためには、普遍的な価値となりつつある持続可能性という概念がキーになるのではないだろうか。

そのためには、上記に述べた寺院の社会的役割に加えて、森林(自然環境)とコミュニティとの関係性という視点から考えてみると、持続可能性という概念をあてはめやすいのではないだろうか。

このプロジェクトにはカンボジア社会や文化に関する色々な要素が入っており、筆者にとって大変興味深いものであった。研修生として受け入れてくださった SVA カンボジア文化事業課のイートン氏、ピチェット氏はじめ、八木沢所長、スタッフの鈴木さん、パルさん、スラム事業課の皆さま、学校建設事業課の皆さま、図書館事業課の皆さま、その他 SVA の皆さまに感謝申し上げたい。